

蒼
所
望

塩月弥栄子

文藝春秋新社

花所望 著者塩月弥栄子 発行者上林吾郎 発行所文藝春秋新社東
京都中央区銀座西八ノ四 印刷所凸版印刷 製本所加藤製本 製函
所加藤製函 昭和四拾年参月式拾五月初版発行 定価四百参拾円

©

1965

Yaeka

Shiotsuki

Printed

in

Japan

目次

花所望

結びやなぎ

一〇

こぼれ梅

一三

菜の花供養

一七

春はなびらの

二一

花もちりテットン

二四

露をうつ

二七

今日庵初見

三〇

朝顔の茶

三五

一本の野菊

三八

花のいのち

四一

草のなごり	四四
けずり花	四七
茶室のひるね	
あぐら茶の湯	五二
茶室のひるね	五七
外国人とお茶	六三
花だより	六六
炉	七三
セツチン	七五
入門の人に	七九
野点	八三
立札あれこれ	八五

夜咄七夜

夜咄

九二

懷石

九六

珠光餅

一〇〇

扇

一〇三

空也堂

一〇七

鉢開き

一〇九

十夜

一一三

道はすべて一つ

父からの電話

一一八

わが母のおしえ

一二四

私の小さな武勇伝

一二八

おそうじ・おせんたく 一三二

ヒミツとわたし 一三五

すばらしいタジ・マハール 一四四

アメリカお茶の旅 一四六

シアトルの人々 一五一

ディズニールランドとお茶 一五五

京のお正月 一五七

小さなキッチン 一五九

クリスマス・ケーキ 一六二

和菓子一味 一六四

ドクター・スーパ 一六六

受け皿にあけたコーヒー 一六八

心のおしゃれ	一七〇
プレゼント	一七四
幸せへのおしゃれ	一七七
道はすべて一つ	一八〇
互いを生かす	一八四
「イエス」と「ノー」	一八九
化粧	一九四
若狭の駅など	一九七
オジ様方 頑張れ	二〇〇
題字 松丸東魚	

花
所
望

花 所 望

中立の間に置花入にても掛花入にても水を八分目程入置床の真中に莊り置花台のと同じ目向にして左の方に花右の上の方に花水次花と水次の間に小刀始め如図莊り置……後座に客揃たらば兼て莊置たる床の花入の前軸末の所に置付茶道口の外へ出上客へ御花御活と乞也上客次に挨拶致し置立て花を活に行……水を次又花台にのせ小刀も遣有無に拘らず刃の方を水次の方に直し置き元の座に歸る主出て花を拝見して後花台を持入る也初小刀花に付て置……

(小習事十六ヶ条目錄より)

結びやなぎ

茶の湯のお正月の初会を「初釜」とよぶのが通例になった。その初釜の席といえば、それぞれ今年のおよそおいを凝らして、目出たく華やかな道具立をきそうなかで、裏表そのほか千家の一門の流儀では、花はおしなべて柳と椿にきまっているのは、いっそ春らしく心安らかでよい。ことさら裏千家では柳を大きく用いるのが習いで、茶人ともいわれる人は、歳末ごとに一丈にあまる枝垂れ柳の用意に心をくだくのである。

家元はじめ上方の茶家には、年々きまつて鳥取のあたりから柳の輪が送られることになっている。随分長く枝垂れているようでも、京都の疏水や東京の銀座の柳ではむつかしいのである。「柳に雪折れなし」の諺どおり、山陰の雪深いところにあの見事な枝条がつくられるのであるうか。

茶室の床の間には、この柳を入れた筒花入を懸けるための柳釘というのが天井ちかくの隅に打たれてある。落し掛けの内らの薄くらがりに、青むらさきの黒目柳の数条がつややかに垂れ、その穂先が床疊にゆたかな波をめぐらせるのは、ほんとうに素晴らしい意匠効果といえよう。しかも途中を一つ輪にたがねて結び柳の吉兆をあらわすのだから、よほどに長く見事な枝ぶりが必要なのである。ツバキのほうは白玉、曙、大神楽、獅子口など紅白とりどりに、しかし花の数は一つ二つに新年の明るさをこの一点に凝結させる。花入はまずこと改まった古銅鶴首、青磁下蕪は清麗高雅に、濡れ木地の敷板の伊賀や備前は朴訥に壮大さを秘めてそれぞれ一輪の椿にかぎりないのちを与える。竹花入は侘び茶の本領で、伝世のツヤで底ひかる一節切―ひとよぎり―に投げ入れた一花に、清楚と豪華の両極が一になることを目のまえにつかみ得よう。

生花の使い方と違って、二重筒には下段にのみ花を入れ、上は水を張るばかりというのが茶

の湯の方のおもしろい扱いだが、正月の床にだけは双方に生けることも許される。

正月の花として柳と椿のとり合わせは立花——りっか——にその源流があることであろう。室町前期の茶礼のことは知られぬが、侘び茶となつてはその発生期の天文永祿のころの古記録に、初春の席の柳が散見する。椿は旧九月から用いられて特に正月とかぎられていぬようであるが、柳はハッキリと一二月にのみあらわれている。「細口——（古銅花入）——薄板ニ柳生テ」などあるのは、草——そう——の立花とでもいう風に、正中——しょうちゅう——に高く枝を構えて入れたものか。柳と梅の取合わせも見える。平安朝以来の伝統からはこの方が古いといえるけれど、枝ものと枝ものでどう生けたものか。

室町のすえ、戦乱の都のマン中にボツンと残されて、後世いわゆるご衰微時代といわれたこのころの禁裡御所でも、さすが昔ゆかしい形は残して、年々の春ごとに「やなぎまいる」と女房の日記に書かれているのは、京に踏みとどまった公家衆から、初春の立花の御用の柳の枝の進献が家例としてはじまっていたらしい。

利休居士の危禍で一度は取りつぶされた千家を再興した宗旦は、祖父に鑑みてか武力政權に近づくことを拒んで、京のはずれ、紫野のほとりに、町衆のなかに影をかくして一生を終えた

が、權勢を背景とせぬミカドの御所には素直に好意を運んで、一代の風流天子後水尾院や東福門院のお召しにしばしば与っているが、さる正月の伺候の折に賜ったのがその糸柳であったという。ことに宗旦を家祖とする今日庵が、正月の柳に見事さを学ぶのはこの由縁——ゆかり——と伝えている。

遠い遠いご先祖にも、利休さまは何やら身内しまる思いで怖いのにくらべて、妙にほど近くなつかしく感じられる宗旦さまが、身丈に余る拝領の柳を輪にためて、立売堀——いたちぼり——通りを小川頭へかついで帰ってくる姿は、不思議なほどありありと眼のうちに浮ぶ。そしてその姿がいつの間にかやら、幼い日になじんだ円能齋じいさま、そしてお軸の字に好みの道具に、一日として会わぬ日のない大ひいじいさまの玄々齋の面影にだぶってしまうのである。

こぼれ梅

利休居士の逸話はいろいろ伝えられているなかで、さる日秀吉から、床の馬盃に梅を生ける

ことを求められた利休は、床前に進むと無造作に鹽の上にかかる梅の枝をしごいて水面に点々と花をちらし、枝をもって水屋に入ったので、一座アッと感歎したというのがあります。侘び茶の開山の居士にしては少し芝居気がありすぎて、作りばなしのように考える人もあるのですが、利休と同時代の堺の茶人である津田宗及の自筆茶会日記にも、これははじめ青磁の花入に生けた白梅紅梅を、後入りの席には枝をぬき花をむしって薄板の上に散らしたという、ある早春の一会の記録が見えますから、当時ではさして突飛な所作でなかったのです。

花道史には無案内ですが、現在「茶花」とよばれている茶道独特の「花」は、もう東山時代に生まれていたと思われれます。立花の精密な構造性に対して、形よりも心を主にするこの小品自由花は、利休を頂点とする茶の湯の大成期にはいよいよ好まれて、茶会の重要なポイントとなります。

無定形を標榜しながら、何となくまとまってしまった現在の茶花とちがって、千変万化のアイデアが楽しめたのです。

茶の湯のおもしろさは、どこまでも主客相互の感興の上にたちます。きょうは利休がどんな花を入れるかを待ちかまえる秀吉以下の一座の客、それも日ごろよく利休の花を見知っている